

# 繼体天皇皇后手白香皇女 裕田陵の原状復旧に伴う調査

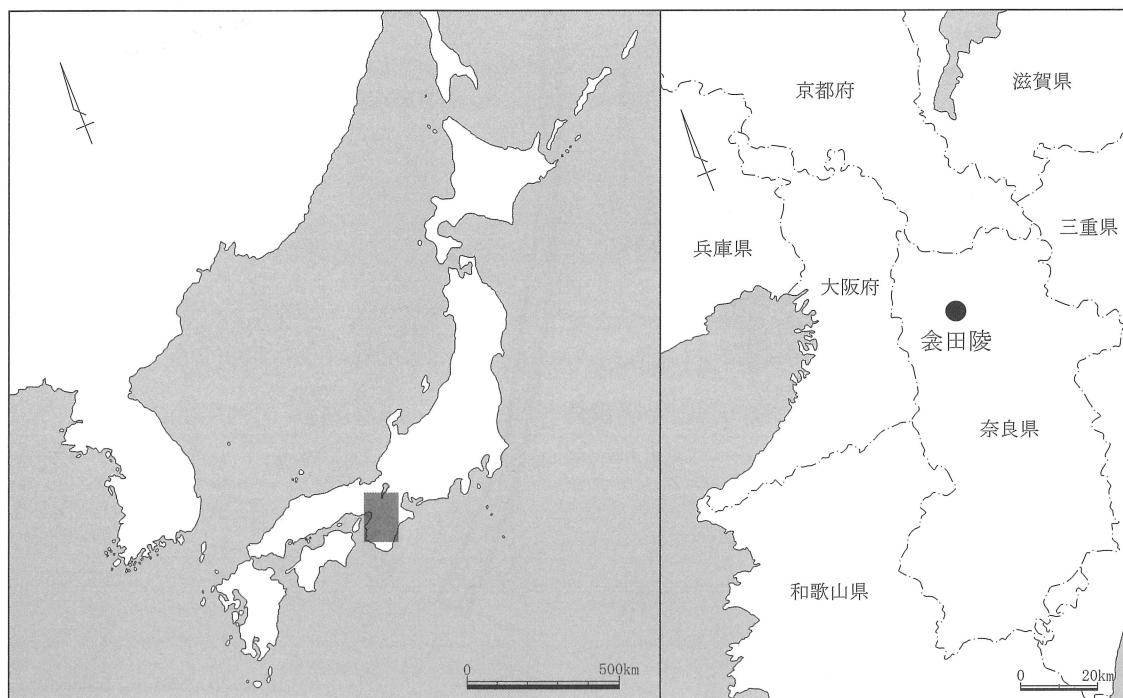
## はじめに

本陵は、奈良県天理市中山町字西殿塚151番地に所在する。奈良盆地東南部の一角に展開する大和古墳群に属しており、後円部を北に向ける前方後円墳である。

**本陵の立地** 本陵の東には奈良盆地と大和高原の境となる山塊が南北に延びている。大和古墳群は、その多くの古墳がこの山塊から西に延びる尾根を利用して築造されている。本陵も同様の立地といえるが、本陵の位置する中山町から北の萱生町、竹之内町付近はやや不明瞭ながら扇状地となっているようである。広く安定した斜面地に築造されており、他の古墳と比較すると立地条件に恵まれているといえよう。しかし、実際はそれなりの傾斜面であるために、墳丘側面の裾やテラス面では東西で高低差が認められ、東側が高くなっている。また、やや詳しく周辺地形を見てみると、本陵はこの扇状地の南側縁辺部に築かれており、本陵前方部の南には西方向から小さな支谷の入りくんだ大きな谷が入り込んでおり、急激に地形が下る様子を見て取れる。そのために、西に向かい合う生駒山、二上山、葛城山、金剛山の山並みはもちろんのこと、奈良盆地のほぼ全域を臨むことのできる眺望の地といいうことができる（第86図、図版24）。

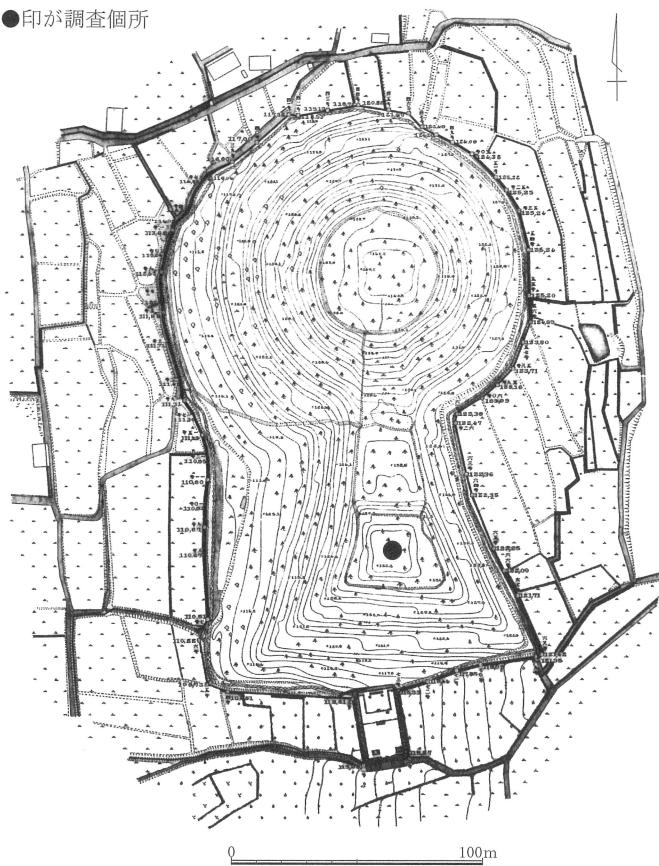
**周辺の古墳等** 本陵の周辺には、古墳をはじめ多くの遺跡が密集している。すぐ東側に並列する東殿塚古墳をはじめとして、燈籠山古墳、中山大塚古墳、下池山古墳など、出土遺物もある程度知られた著名な前期古墳が知られているほか、後期古墳とされる西山塚古墳も至近の位置にある。また、北方の乙木・佐保庄遺跡では古墳時代前期の注目される遺物が出土している。その他、中世では本陵の西南西にそびえる龍王山上に中世城郭として名高い龍王山城が築かれていた。

**本陵の規模と構造** 墳丘は、精美な3段築成である。全長約220m、後円部径約125m、前方部長（くびれ部から前方部前面）約95m、前方部前面幅約115m、西側裾からの後円部高約24m、前方部高約16mを測る。そして、後円部と前方部の各頂上平坦面には、それぞれ1段築成の方形壇が構築されている。前方部の方形壇は、前方部頂上面のうち、方形壇の北辺に沿った部分で段を設けていることから、墳丘鞍部から見

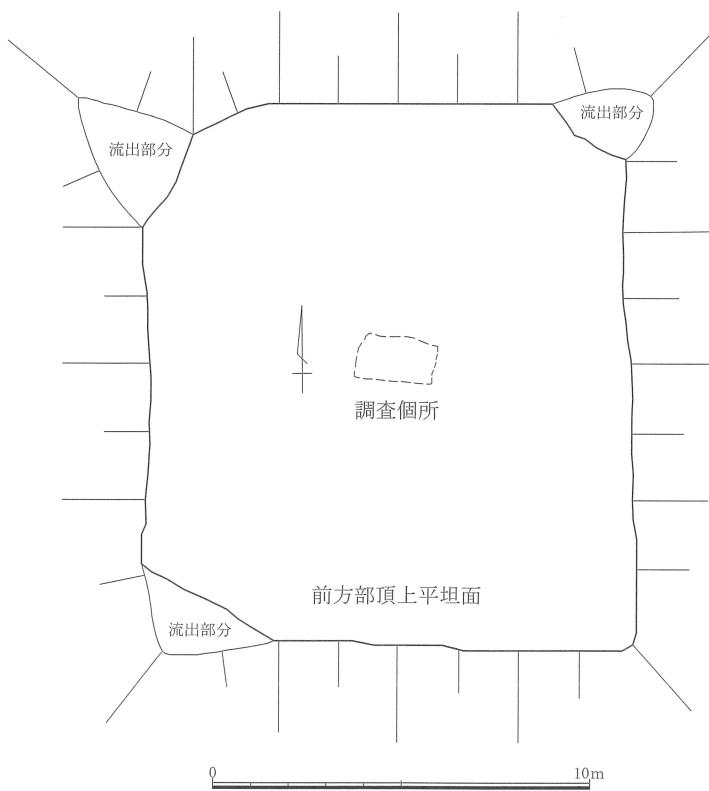


第86図 裕田陵 概略位置図 (1/25,000,000、1/2,000,000)

●印が調査箇所



第 87 図 薮田陵 調査箇所位置図 (1) (1/3,000)



第 88 図 薮田陵 調査箇所位置図 (2) (1/200)

ると、みかけ上は 2 段築成の方形壇に見える（第 87・88 図、図版 47-1）。また、墳丘の西側裾部の外側には「エプロン」と呼称されることの多い平坦面が形成されている。

**既往の調査** 本陵に関しては、平成元年に当庁により墳丘調査が実施されており、墳丘各所の断面図が作成された。その成果については『書陵部紀要』第 42 号に詳しい<sup>(1)</sup>。

昭和 61 年および平成 5~7 年には、天理市教育委員会により墳丘周辺で発掘調査がおこなわれており、前方部東側では葺石を備えた墳丘裾が検出された。これにより、本来の墳丘裾は現在の境界線の外側に位置していることが明らかとなった。遺物としては、普通円筒埴輪が多く出土している。特殊器台、特殊器台形埴輪と共に伴する段階に、普通円筒埴輪が出現して一定量の配列が推測されるに至ったことは、重要な成果といえよう<sup>(2)</sup>。

## 1 調査に至る経緯と調査の方法

平成 24 年 8 月 13 日に、蓑田陵を巡回中であった畠傍陵墓監区事務所職員が、前方部方形壇頂上平坦面において掘削をおこなっている侵入者を発見したため、即座に必要な対応をとった後、復旧に関して関係各機関との協議・検討をおこなった。

原状復旧にあたっては一定程度の考古学的調査の必要性が認められたことから、陵墓調査室の職員を派遣して調査を実施することとなり、8 月 15 日~18 日の 4 日間で実施した。調査は畠傍陵墓監区事務所と協力しておこない、文化庁、奈良県教育委員会、天理市教育委員会からも種々ご協力、ご教示をいただいた。記して感謝申し上げたい。

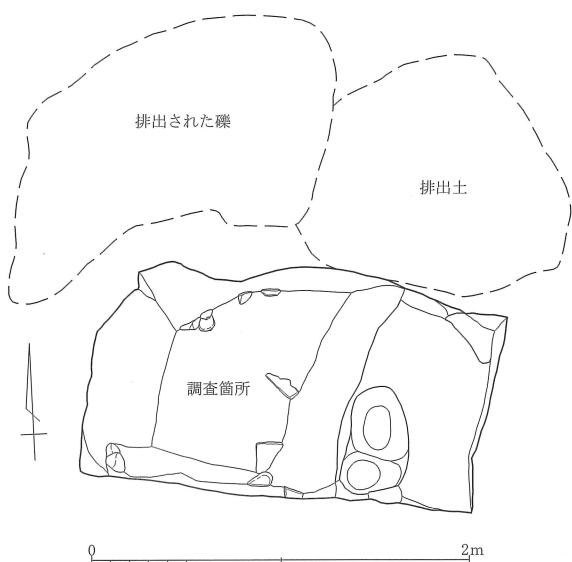
**掘削箇所の状況** 掘削箇所は平面形がおおむね長方形を呈しており、その規模は東西約 1.9 m、南北約 1.1 m を測る。

深さは最大約 0.4 m であった(第 89 図、図版 47 - 2 ~ 6)。掘削坑は均一に掘り下げられていたわけではなく、中央付近より東側が表土を除去したところでいたん掘り下げを止めた状態であった。よって、西側が先行して掘り下げられたような状況であり、その深さが地表下約 0.4 m であった。断面からは表土の下に、礫が堆積する状況が認められた。礫層には土が詰まった箇所と、隙間の認められる箇所があった。掘り上げられた土と礫は、掘削箇所の北側に分けて積み上げられた状態にあった。

**調査の方法** 掘削箇所は、前方部方形壇頂上平坦面の中央部付近である。位置の特定にあたっては、墳丘内を見通せる位置にある境界石標を探し、そこからトータルステーションを用いて順次杭を設定して、掘削箇所付近に実測用の杭を設置することとした。

その後、まず図面と写真による現況の記録を作成して、その後に壁を整えてトレーニング同様の形態とした上で、遺構の残存状況を確認する精査をおこなうこととした。掘削坑じたいの平面形態が、図らずもほぼ長方形を呈していたため、これをを利用して新たな掘削は最小限にとどめた。床面についても、下に礫が続くか否かを確認するために一部を掘り下げるにとどめる方針でおこなった。

また、埋め戻しについては、断面で観察された層位を復元するようにおこなうこととした。



第89図 萩原陵 原状復旧箇所調査前平面図 (1/40)

## 2 調査の所見

現況記録を作成した後に掘削箇所の精査に入った(第 90 図)。

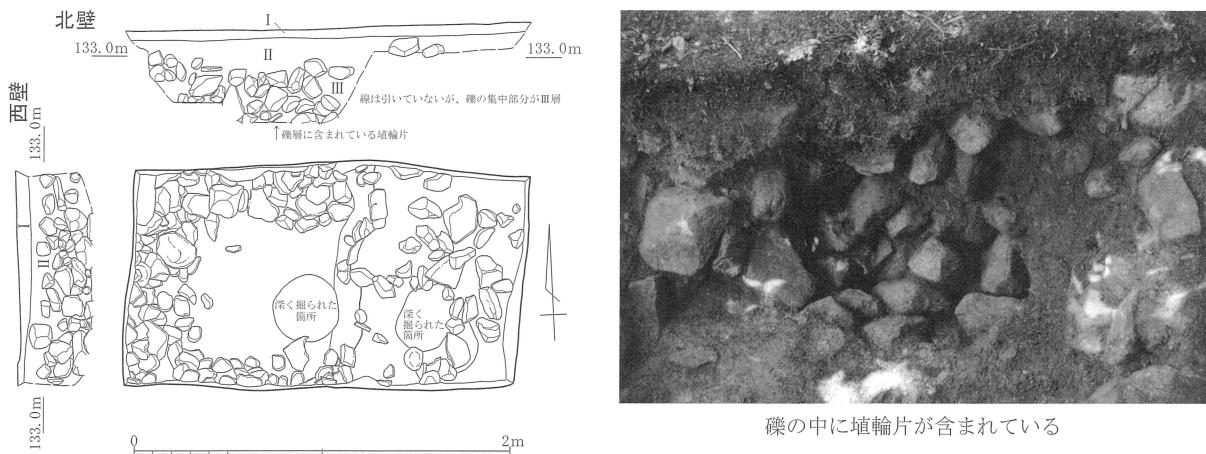
**土層** 先に、より深く掘られていた西半分について壁面の整形と清掃をおこなって、断面の詳細な把握に努めた。この精査で、西半分の残存する礫層の多くの部分を検出した。この時点での精査の結果からは、表土(I)の下に部分的に比較的堅緻な明黄褐色土(II)が認められ、礫層(III)の上面を覆っているようにも見受けられた。しかし、明確に認められる範囲は、壁面付近などわずかである。

次に、東半分の表土を除去した状態で止まっていた面を清掃して、礫と明黄褐色土の関係を平面的に確認した。その結果、明黄褐色土が礫の間を埋めている状況が認められたが、全体的に軟らかいものであった。西半分の断面でみられた堅緻な層位としては確認されなかったことから、堅緻な土層は部分的なものであったと考えられる。また、礫の密度も西側に比べるとやや低いと考えられ、礫の入り具合も場所によって異なる様相を示している。

最終的に、西半分での床面の精査を行う過程において北壁沿いで床面の土を除去して、下に礫層が続くか否かを確認した。その結果、礫は下まで続くことが判明した。(図版 47 - 7)。

**礫層について** 調査の結果、表土(I)と明黄褐色土(II)の下、あるいは II 層と混在する形で約 40 cm の厚さで拳大から人頭大の礫を用いた礫層(III)が確認された。礫層の上面を覆うように黄褐色土が認められ(第 90 図)、礫の隙間にはおおむね土が流れ込んでいたが、一部に隙間も認められた。また、掘削が及んでいないと考えられる範囲であっても、全体に軟らかく、根のはびこる箇所が認められた。また、精査中に埴輪片の出土もみられたが、このような状況が、掘削の影響により入り込んだものか否かは、当初は判断が難しいものであった。最終的に北壁沿い床面の一部の土を除去して、下に礫層が続くか否かを確認したが、下からも礫は検出されたため、礫はさらに下に続くと判断される(第 90 図)。

重要な知見としては、掘削の及んでいない礫層内から埴輪片が検出された点である(第 91 図、図版 47 - 8)。これは、先述の精査時における遺物出土状況に対応すると考えられ、礫層内には埴輪片等の遺物が含まれて



第90図 金田陵 原状復旧箇所調査後平面図・断面図 (1/40) 第91図 金田陵原状復旧調査箇所 北壁詳細 (南から)

いることが判明した。これにより、調査箇所内で検出した礫層を築造時の遺構と考えることには否定的であるとの結論を得た。

以上のことから、現状の前方部方形壇頂上平坦面の中央付近は、過去の掘削箇所を埋め戻した状況にあり、その範囲は今回の掘削範囲より広く、深いものであったと考えられる。その規模は不明ながら、確実に築造時の遺構と判断できる礫層は、今回の掘削範囲内には確認できなかった。また、築造時にこのような礫層が形成されていたかどうかも、精査範囲内だけでは判断できない。

いずれにしても、掘削範囲は過去における掘削箇所埋め戻し部分に収まっており、築造時の遺構を新たに破壊はしていない可能性が高いと考えられる。

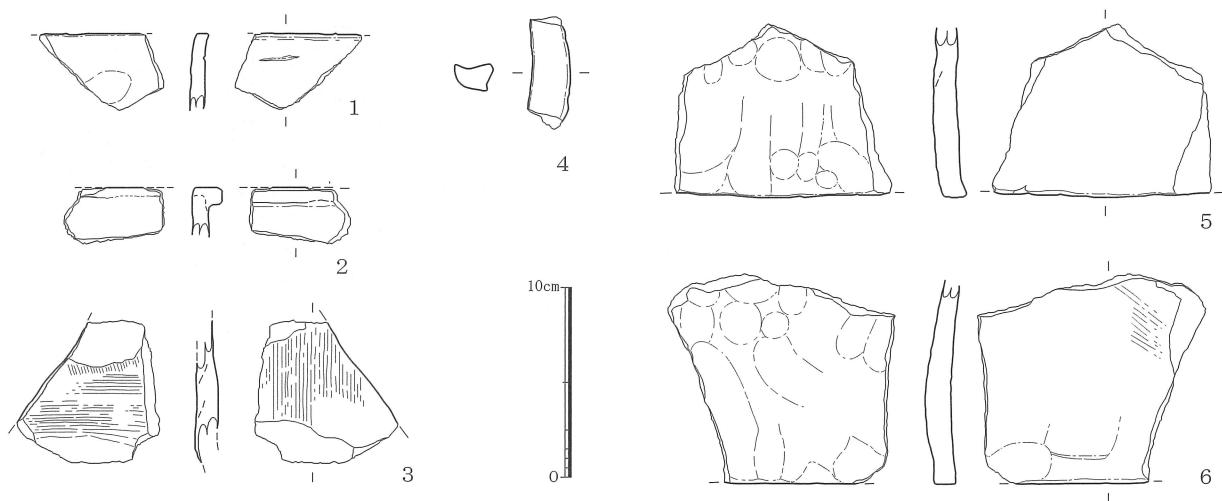
なお、この礫層にみられる石材は墳丘面に確認される葺石と同様と考えられるが、比較的大量と思われるこれらの石材の入手方法や、礫の大量使用が方形壇の構築方法を反映しているか否かについては、調査範囲内からでは不明と言わざるを得ない。

### 3 遺物

遺物は、埴輪と土師器（かわらけ）の破片がみられた。掘削による出土中から回収されたものと、精査中に出土したものが多くを占める。当初、精査中に検出されたものは、掘削による踏み込み土に混入したものか否かの判断が難しかったが、確実に礫層内に含まれることが明らかとなったことから、いずれにしても原位置をとどめない遺物と判断できる。

その他は、測量の作業中、あるいは調査の合間に墳丘を踏査している中で、墳丘面から採集した遺物である。採集遺物については、すべて埴輪片である。埴輪片には、口縁部、底部の破片のほか、特殊器台形埴輪の透孔付近と考えられる破片のほか、壺形埴輪の一部と考えられる破片もみられる。以下に、概略を示したい（第92図、図版47-8）。

1は特殊器台または特殊器台形埴輪の口縁部と考えられる。高さは約4cmが残存する。内外面指ナデ調整である。盜掘出土から採集された。2は特殊器台または特殊器台形埴輪の胴部かと考えられる。突帯と透孔にかかる位置と考えられる。高さは約3cmが残存する。調整は摩滅のため不明である。調査箇所内清掃中に出土した。3は特殊器台または特殊器台形埴輪の胴部と考えられる。逆三角形透孔の一辺が確認できる。高さは約7.5cmが残存する。内外面ともにハケメ調整である。前方部方形壇北東隅で採集した。4は壺形埴輪の頸基部の突帯と考えられる。幅は約6cmが残存する。指ナデ調整である。盜掘出土から採集された。5は特殊器台形埴輪もしくは普通円筒埴輪の底部である。高さは約9cmが残存している。外面は摩滅により調整不明である。内面は指ナデと指オサエによっている。盜掘出土から採集された。6は特殊器台形埴輪



第92図 袴田陵 出土及び採集の遺物 (1/4)

もしくは普通円筒埴輪の底部である。高さは約11cmが残存している。外面はハケメ調整、内面は指ナデと指オサエによっている。北壁中央付近礫層内から出土した(第91図)

## まとめ

今回の調査は、上記したような性格上、清掃に主眼をおいたものであったため、当初は検出された礫層が築造時の遺構であるか否かの判断は難しい部分もあった。また、築造時の遺構についての確実な所見も得られない。

しかし、掘削箇所の精査中に複数の埴輪片を確認した事実から、前方部方形壇頂上平坦面の中央付近は、明治9(1876)年の治定後、いずれかの段階で過去の掘削による窪みを、礫を中心に埋め戻したと推定される。礫は、先述のとおり、墳丘斜面上に見える葺石と同様の石材と考えられる。仮に、前方部方形壇が本来ある程度の礫をもって形成された積石塚状のもので、それが治定以前に一度は掘削されていた可能性を考えれば、その時の礫を使って埋め戻した可能性もある。このように考えた場合は、掘削箇所の礫層が方形壇の本来の構造を反映している可能性を残すことになるといえよう。しかし、この点についてはあくまで推測の域を出るものではない。

なお、精査の結果からは、視認できる範囲内で礫層の状況に変化は認められないことから、少なくとも今回の掘削箇所は過去の埋め戻し部分の範囲内にとどまっており、新たに築造時の墳丘、もしくは遺構を破壊することはなかったと判断される。

掘削を受けた箇所は、調査の結果を踏まえた上で、原状に復した。

(清喜裕二)

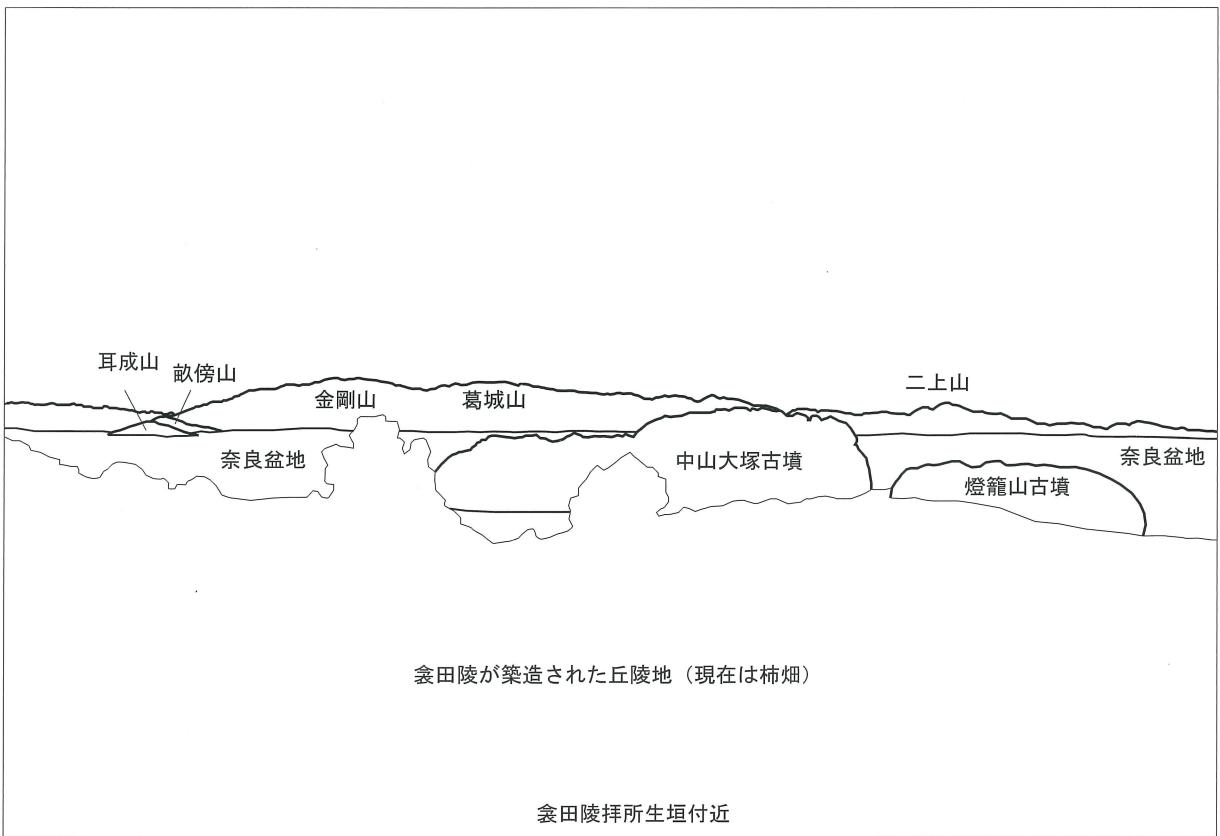
## 註

(1) 福尾正彦「袴田陵の墳丘調査」『書陵部紀要』第42号、宮内庁書陵部、1991年。

(2) 天理市教育委員会編『西殿塚古墳 東殿塚古墳』(天理市埋蔵文化財調査報告 第7集)、天理市教育委員会、2000年。



衾田陵から見た奈良盆地（東から）



衾田陵が築造された丘陵地（現在は柿畠）

衾田陵挿所生垣付近

衾田陵から見た奈良盆地（東から）



1 前方部方形壇の近景（北から）



2 掘削状況（西から）



3 掘削状況（南から）



4 掘削箇所断面（南から）



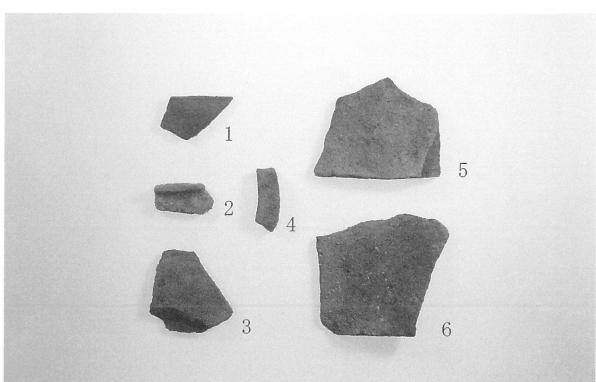
5 精査後全景（南から）



6 精査後全景（東から）



7 精査後詳細 北壁西半部（南から）



8 出土および採集遺物